

# 社会貢献教育推進のための提言書

～ 全ての人社会貢献教育を軸につなぎ、  
～ 学び合える楽しさを共有できる社会の実現を目指して～

# 目次

1. はじめに .....	1
2. なぜ社会貢献教育なのか .....	4
3. 社会貢献教育とは .....	6
4. 推進のために必要な5つのこと .....	8
5. 社会貢献教育を推進するための8つの提言 .....	10
6. 子どもたちの変化・教員の声 .....	12
7. 実施事例紹介 .....	14

# 1. はじめに

いま日本社会の中で、「社会に役立ちたい」と思っている人の割合は66.7%と、約7割の方が自分が社会に役立つことを望んでいます（内閣府、2013）。更に、東日本大震災では7割の日本人が金銭の寄付をしており（日本ファンドレイジング協会、2013）、その後も寄付者の割合は4割台と震災前の約3割を上回っている状況が続いています（寄付白書発行研究会、2015）。この状況は、日本社会の中で社会貢献への関心や意識が高まっていることを表しているのではないのでしょうか。

このような状況の中で、子どものうちから社会貢献について学んでおくことは、自分らしい社会貢献を考える上でとても重要であると考えます。事実、アメリカ、イギリスなどでは、学校で寄付やボランティアなどの社会貢献活動の実践を通じて、子どもの時から自分らしい社会への役立ち方を見つけていきます。更に社会貢献教育は、実践的学びを通じて、子どもたちのみならずそれに関わる全ての人たちにとって変化とつながりを生み出し、応援の連鎖が生まれる状況を作り出すきっかけにもなるのです。

しかしながら、日本では学校教育（初等中等教育）において、社会貢献活動のうちボランティア学習は行われてきましたが、多くの人は寄付について必ずしも学校の中で十分教わってきたわけではないのが現状です。このような状況では、何らかの偶然なきっかけや出会いがなければ、大人になって自分らしい社会貢献を実践することは困難なことが予想されます。

日本におけるこの分野の専門家、実務家が参加している、私たち社会貢献教育推進フォーラムでは、このような現状を鑑み、可能性をもった社会貢献教育を進めるために何が必要かを、約半年間に渡り検討してきました。その結論として、全ての小学校・中学校・高等学校の学校教育の中において適切な形で社会貢献教育が実施され、その中で子どもたちが自分らしい社会での役割と関わり方をみつけられるよう本提言書を取りまとめました。

社会貢献教育は、子どもたち一人ひとりが輝く人生、豊かな人生を歩むために、多様な価値観に基づいた選択による、社会貢献活動の実践を通じて、充実感や達成感を経験でき、自分のかけがえのなさに気付くと共に、社会の構築を目指して主体的に参加できる人材の育成を目指す学習です。

子どもの時に、このような体験を、学校内外の多くの人と共有し、仲間と学びを深めることで、社会に出たあと自分なりの「社会に役立つ」役割をみつけ、自分らしい社会への関わり方をつくってもらいたいと思います。

※内閣府（2013）「社会意識に関する世論調査」  
日本ファンドレイジング協会（2013）『寄付白書 2013』  
寄付白書発行研究会（2015）『寄付白書 2015』

# なぜ社会貢

- 子どもたちが、社会貢献教育を通じて、自己肯定感を高める
- 子どもたちが、社会貢献教育を通じて、学習意欲を高めたり、
- 教員が、社会貢献教育を通じて、児童・生徒・学生と一緒に
- 子どもも保護者も教員も、社会貢献教育を通じて、一人ひと
- 全ての人々が、社会貢献教育を軸につながり、学び合える楽

## 推進のために必要な5つのこと

1. 教科領域と既存の〇〇教育を社会貢献教育が補完しサポートすることを明示する。

2. 教員が適切な社会貢献教育を理解し指導できるようにする。

3. 社会貢献教育を実施するためのサポート体制を構築する。

4. 教員が社会貢献教育に取り組んでみたいと思う気持ちを促進させる。

5. 社会貢献教育が子どもたちにとって必要だという社会的な共通認識を醸成する。

# 献教育なのか

機会を得ることができる。

協働的な学びを体験したり、質の深い教育を受けられる。

失敗も成功も共に体験し、共に学ぶ機会を得られる。

りが社会参画し、社会をつくるという意識をもつことができる。

しさを共有できる。

## 具体的な 8 つの提言

I. 学習指導要領上の教科・領域における教育内容との関連性を整理して具体的な指導案を提示する。

II. ○○教育と関連したプログラムを構築する。

III. 教員向けおよび教員志願者向けの研修の改善を行う。

IV. 社会貢献教育の専門家を育成する。

V. 全国規模の専門的相談窓口の明確化と相談体制・窓口を周知する。

VI. 魅力的な社会貢献教育プログラムの形成と、関心のある教員向けの情報提供を行う。

VII. 教員からの実践事例の発信を行う。

VIII. 社会貢献教育が文教政策に明確に位置付けられるよう働きかける。

## 2. なぜ社会貢献教育なのか

### 社会貢献教育のエピソード

- ・学校の部活動（ボランティア部）で、東北と熊本の震災復興支援のために募金活動を行ったら、卒業生が募金をしにきてくれたり、タクシーの運転手さんから「頑張ってるね。」と、レストランの割引券を頂いたり、と多くの方に見守って頂いていることを実感し、社会とつながっているという経験を持ってました。（高校生）
- ・雄勝町の再生プログラム（モリウミアス）に参加して、それは「肉体労働」って感じだったのですが、その時の達成感はもちろん、モリウミアスができたと聞いた時に自分が関わってできたのだという達成感というか誇りのようなものを感じました。ボランティア部で自分たちが中心となって企画運営したツアーやイベントが終わった時ももちろんとても達成感があります。（高校生）
- ・帰宅後、チャリティチャレンジプログラムで行ったことを詳しく報告してくれました。「とても楽しい活動だ」と言っていたことが印象的です。うちの子どもは手紙を渡す役割だったようですが、自分も社会に役立つこともあると実感できたのではないだろうかと思います。（中学生保護者）
- ・募金活動をきっかけに、地域と学校の関係が近くなりました。住民組織としては、学校に関わりたくても具体的な接点がなく、学校側からの働きかけを待っていました。募金など、具体的な取り組みは協力しやすいと思います。地域のさまざまな人が学校運営にボランティアで参加するようになり、学校公開時の受付や学校行事のお手伝い、家庭科の指導補助など、関わる場面が多くなったことはよかったです。（地域の住民）

社会貢献教育は、関わる全ての人たちにとって、変化とつながりを生み出します。応援の連鎖が生まれ互いに応援し合える状況を作り出す、それが社会貢献教育がいま必要とされる理由です。

### 子どもたちにとって

1. 社会貢献教育を通じて、自己肯定感を高める機会を得ることができます。支援先からの感謝や成果を知ること、自己有用感の醸成につながります。例えば、国際協力のNPOから現地の子どもたちからの御礼の手紙を受け取ったり、児童労働がなくなったという報告レポートをNPOから受け取ることで自分が誰かの力になっていると実感を持てます。或いは、実際の募金活動やボランティア活動を通じて、「ありがとう」と言われることで自信をつけることにもつながります。
2. 社会貢献教育を通じて、学習意欲を高めたり、協働的な学びを体験したり、質の深い教育を受けられます。体験を教室で振り返るリフレクションを行い、互いの経験を共有することで、自分が経験したことを内省し更に深められます。募金活動などでは、児童・生徒同士や教員と児童・生徒が共に助け合い工夫しながら計画を立て実行する過程を通じて、協力する経験を得られると共に、自分たちの行ったことを教室に戻ってみんなで振り返ることで、体験を学びにつなげることができます。また体験を教科学習と結びつけることで、学習意欲と社会性を高めます。
3. 特別支援学級の生徒たちが、支援の主体になることで自信をつける機会を得られます。一般学級の生徒たちの支援活動を受け入れるだけでなく、逆に支援する側にもなることができます。ある中学校では、特別支援学級の生徒も一緒に募金活動を行った経験を、一般学級の生徒と行えて良かったと感じました。

## 教員にとって

4. 教員が、社会貢献教育を通じて、児童・生徒・学生・地域の人・保護者などと一緒に失敗や成功を共に体験し、共に学ぶ機会を得られます。各教科・領域の授業において教員は「答え」を知っていますが、社会貢献活動ではそのような答えはありません。一人ひとりの価値観に基づき行うことが最も重要で、教員も社会貢献教育の中では失敗と試行錯誤ができるのです。このような経験が、学校外で教員をサポートする仲間を増やすことにもつながります。

## 周囲の大人たちにとって

5. 子どもも保護者も教員も、社会貢献教育を通じて、一人ひとりが社会参画し、社会をつくるという意識をもつことができます。子どもたちの社会貢献活動を軸にしなが、その活動を支える全ての人々がつながり、同時に学び合える楽しさを共有できます。

## 学校にとって

6. 小中高校では、学校を地域に開き、児童・生徒を地域の大人たちと交流させることで、社会性を身に付けさせられると同時に、地域との関係を築くきっかけになります。例えば、社会貢献教育の取組みだけでなく、防災など地域との連携が必要な場面で連携できる関係性をつくることができます。
7. 大学では、地域への社会貢献を大学運営の核に据えることで、独自の魅力向上につながられます。

## 家庭にとって

8. 親子で同じ授業を受けた子どもたちが、家庭で親と一緒に社会貢献を考える機会を持つ事例は少なくありません。例えば、社会貢献教育を行った、ある中高一貫校では、保護者も一緒に授業参観したことで、家庭に帰ってから親子で自分たちらしい社会貢献を考えるようになりました。

## 社会にとって

9. 一人ひとりが社会参画し、社会をつくる主体的意識の形成を促すことができます。また、例えば地域の様々な社会課題の解決に取り組むことを通じて、地域での信頼のある人間関係を築くことにもつながります。

# 3. 社会貢献教育とは

## 実践を通じて

### 要素1：社会の中で自分の役割を考えるきっかけを提供

社会貢献活動の実体験を通じて、学校や家庭以外で、多くの人たちに支えられ、つながっているんだという経験をえられる機会があります。

### 要素2：実践を通じて達成感を得られる体験ができる

児童・生徒同士、また教員と児童・生徒が、協力し試行錯誤しながら社会貢献活動を実体験することで、互いに助け合い、一緒に成し遂げる達成感を得られる機会になります。

### 要素3：自分の価値観で選ぶことの大切さを考えらえる

自分の価値観で、支援したい、関わって応援したい社会貢献活動に参加することで、自分の大切にしている価値観を見つける機会になります。

### エピソード1

一番印象に残っていることは、ネパールに履かなくなった靴を寄付した時のことです。団体を通して寄付をしたため、その方たちが寄付した靴を運搬してくれてネパールの子供たちに届けて下さったこと。そのネパールの子供たちが寄付した靴を履き笑顔でお礼を言っている動画を観た時は、子供たちと繋がっていると感じました。また、その最後まで運搬して下さった方々、寄付をしてくれた学校の生徒などたくさんの方が繋がっていると感じました。

### エピソード2

やはり、ボランティア活動での人とのつながり、というのはスタディツアーが一番大きいです。ツアーを通じて出会った女川の人に東京のお祭りで会ったりして、その時に覚えてくださって喜んでいただけただけなのに、つながりを感じました。普通に高校生活を送っているのでは出会うことができないであろう方々とながらを持つことができたように思えます。また、仮設住宅で肩もみなどをした時も「また来てね」と言ってもらえた時に「自分が必要とされているのだな」と言ったら大袈裟ですが、そのような気持ちにもなりました。

### エピソード3

社会貢献教育を実施したある中学校では、その後高校進学のための志望動機書に、参加した生徒一人ひとりがしっかりと自分なりの意見を書けるようになっていました。

学校で決めたところに募金するのではなく、自分たちで募金先を考えて募金集めを行うという正解のない問題に向き合い、自分たちなりに答えを出した経験が、生徒の自信につながったと、校長先生は考えました。



社会貢献教育は、子どもたち一人ひとりが輝く人生、豊かな人生を歩むために、多様な価値観に基づいた選択による、社会貢献活動の実践を通じて、充実感や達成感を経験でき、自分のかけがえのなさに気付くと共に、社会の構築を目指して主体的に参加できる人材の育成を目指す学習です。

このような社会貢献教育には、3つの要素があります。

1つ目は、社会貢献活動を通じて、人や社会とのつながりや自分のかけがえのなさを感じられる点です。寄付やボランティア活動などの実体験の中で、地域の大人や卒業していった先輩、他の学校の児童・生徒などと協力したり支援を受けたりすることで、家庭や学校以外での人とのつながりや社会の中での自分の役割を認識することができます。

2つ目は、自分の行動を通じて、社会課題の解決に参加する経験ができる点です。自分が主体となって社会貢献活動を行うことで、周りの人々を巻き込み課題の解決に向けて行動する経験ができます。このような体験は、子どもたちに「自分で何かを成し遂げた」という達成感を与えると共に自己肯定感に結びつく機会となります。

3つ目は、社会課題の解決に自らの価値観で判断し参画することを通じて、外部の評価に流されることなく、自分が大切にすることをしっかりと考えられる点です。社会貢献活動の現場体験とそれを学校の中で振り返ることを通じて、自分が大切にしている価値観に気付き深めていくことができます。

# 4. 推進のために必要な5つのこと

社会貢献教育を推進するためには、教科・領域などの制度上での位置づけ、教員向けのレクチャーや専門家のサポート体制の構築、教員自身が行ってみたいという気持ちの促進や、社会貢献教育が必要であるという認識の醸成を行うことなどが重要です。

## 1. 教科・領域と既存の〇〇教育を社会貢献教育が補完しサポートすることを明示すること

- ・新学習指導要領では、「より良い学校教育を通じて、より良い社会をつくるという目標を学校と社会が共有して実現する」ことを目的として、社会と連携・協働しながら未来の創り手となるために必要な資質・能力を育むとしています。また、より良い学校教育を通じてより良い社会を創るという目標を持ち、教育課程を介してその目標を社会と共有していくことや、地域の人的・物的資源を活用した社会教育との連携を図り学校教育を学校内に閉じないことなどを理念に掲げています。具体的に、高校では新科目として「公共」を新設するなど、新しい時代に必要となる資質・能力を踏まえた科目の見直しを行っています。社会貢献教育は、総合的な学習の時間や特別活動の時間だけでなく、社会科（公民科・地理歴史科）や家庭科、道徳の時間などでも、教科の教育内容を補完充実させるためにできることを、小中高校の各学習指導要領と関連付けて、整理する必要があります。
- ・既に学校教育では、「社会に貢献し社会形成に参加するための教育」として、キャリア教育、ボランティア学習・福祉教育、シティズンシップ教育、グローバル人材・国際理解教育・開発教育、ESDなどの教育が広く取り組まれています。これらの教育はいずれも、教室内での知識の習得、学習である「学び」の側面と体験活動を伴う「行動」の側面を持っていますが、社会貢献教育は、これらのいずれの教育とも関連し、その内容を充実させることが可能です。例えば、キャリア教育と社会貢献教育が連携した形としては、課題解決に取り組むNPOの仕事に接することで、自分なりのNPOへの支援の仕方を考えることにつながります。このような他教育との連携の形を具体的に明示することが必要です。

## 2. 教員が適切な社会貢献教育を理解し指導できるようにすること

- ・現在、教員志願者とくに小学校および中学校の教諭の普通免許を取得するためには、介護体験が法律で義務付けられています（小学校及び中学校の教諭の普通免許状授与に係る教育職員免許法の特例等に関する法律）。現状では教員免許取得過程で、法律により義務づけられている教員の社会的体験はこの機会に限られています。
- ・このような状況を改善する必要があります。例えば、教員志望の学生等や教職課程に在籍している学生等に社会貢献教育のプログラムを提供するという考えられます。
- ・教員が制度上の保障を受けて、社会貢献体験をするということが広がっていくことが必要です。具体的には、都道府県、市区町村の教育委員会の採用条件に社会貢献体験の有無を加えるなどがあります。

### **3. 社会貢献教育を実施するためのサポート体制を構築すること**

- ・学校に社会貢献教育を浸透させるためには、左記のような教員への社会貢献の体験や研修を実施し、教員が社会貢献を理解できるようになると共に、指導における専門的なサポートが欠かせません。教科指導に加え様々な校務を担う教員だけが授業に取り組むのは困難であることから、学校を地域社会とつなぎ、社会貢献教育を理解しプログラムを教員と一緒に作り実施していく専門家を育成し派遣する仕組みを構築することが不可欠です。

### **4. 教員が社会貢献教育に取り組んでみたいと思う気持ちを促進させること**

- ・教員が「子どもたちにとって必要な教育である」と感じ、実施したいと思ってもらえる魅力的なコンテンツ（教育プログラム）を揃えると共に、他の教員による実践事例を教員が知り、簡便に情報を得て実施のノウハウを知ることができる仕組みをつくる必要があります。
- ・子どもたちの自己有用感の向上や社会性の獲得、学習意欲の向上など、教員が抱く子どもたちに育みたい資質・能力と社会貢献教育の関係を整理して提示することも必要です。

### **5. 社会貢献教育が子どもたちにとって必要だという社会的な共通認識を醸成すること**

- ・社会全体で、寄付やボランティアをはじめとした社会貢献教育はこれからの子どもたちに必要だ、という共通認識を醸成することが必要です。
- ・そのためには、子どもたちのみならず、これまで学校において社会貢献についての教育を受けて来なかった大人たちにも、社会貢献教育の機会を提供する必要があります。例えば、学校での社会貢献教育に保護者も参加できるようにするなど、親子で学ぶ機会を創出していくことも考えられます。社会貢献教育は、各人のそれぞれの価値観の数だけ答えがあるため、保護者も子どもと共通のテーマで考えや意見を共有できることで、親子で共に意識の醸成を図ることができます。
- ・現在、高校公民科の新科目「公共」の在り方が検討されており、現代社会の課題解決に向けて、他者と協働し主体的な社会参加をする資質・能力の育成が目指されていることも、社会貢献教育の広がりを後押しする流れとなっています。

# 5. 社会貢献教育を推進するための8つの提言

社会貢献教育の具体的な推進のためには、学校や教員ができること、NPO など民間の非営利組織ができること、行政などができることなど、それぞれの立場での取り組みを行い、それらをつなげていくことが必要です。

## 1. 学校の教科・領域との関連性を整理して具体的な指導案を提示する。

現状の小学校・中学校・高等学校の学習指導要領、特に特別活動の時間、総合的な学習の時間、道徳、社会・公民・地理歴史、家庭科などの教科・領域との関連性を図って、具体的な指導案を作成・提示することが必要です。

## 2. ○○教育と関連したプログラムを構築する。

「社会に貢献し社会形成に参加するための教育」とは具体的には例えば以下のようなものが考えられます。これらを標準パッケージとして用意することが必要です。

- ①キャリア教育×社会貢献教育「NPO での職業体験を通じて、人生の中で自分らしい社会貢献を考える」
- ②ボランティア学習×社会貢献教育「自分で行き先を選択できるボランティア体験を行い、クラスメートと振り返りを行うことで、自分らしいボランティアを見つける」
- ③シティズンシップ教育×社会貢献教育「自分たちの住む街の課題を調べその課題解決に取り組む NPO を調べて、自分たちのできる支援の形を考える」
- ④グローバル人材×社会貢献教育「海外での NPO 体験、社会貢献活動への参加の機会の提供」
- ⑤ESD ×社会貢献教育「様々な ESD のテーマの中から自分で選び、関連する NPO の活動への自分らしい支援の仕方をみつける」

## 3. 教員向けおよび教員志願者向けの研修の改善を行う。

教員向け研修として、社会貢献教育を体系的に理解し、教員自身も体験できるプログラムを用意する必要があります。また、社会貢献教育とも深く関連するサービスラーニングは、大学で先行した取り組みが行われているため、大学のサービスラーニングセンターと連携し、教員志願者の大学生が地域の小中高校生のために社会貢献教育を行う取り組みなどと組み合わせることで、体験の充実化を図ることも必要です。

## 4. 社会貢献教育の専門家の育成を行う。

教員をサポートし、学校と地域社会をつなぎ、社会貢献教育の全体像を理解したうえで、各学校に最適な社会貢献教育プログラムを提供できる専門家を育成する、体系的なカリキュラムを整備します。特に、地域で社会貢献教育の拠点を持ち、人材の育成をしていく必要があります。

## 5. 全国規模の専門的相談窓口の明確化と相談体制・窓口の周知を行う。

多くの教育プログラム提供主体が課題と感じている、学校とのつながりをつくっていくプラットフォームを横断的につくっていくことが必要です。社会貢献教育推進のためのプラットフォームを形成し、教員および学校からの相談対応体制を構築する必要があります。具体的機能として、①様々な社会貢献教育プログラムの紹介と提供、②社会貢献教育が進むための提言と広報、③学校へ社会貢献教育を提供するための専門家の育成と派遣調整などを担います。

## 6. 魅力的な社会貢献教育プログラムの形成と、関心のある教員向けの情報提供を行う。

魅力的な社会貢献教育プログラムと主要なプログラムの指導方法をまとめたハンドブックを作成し、購入できる体制を整えると共に、既存のさまざまな社会貢献関連のアワード等に応募している学校に対しては、個別にプログラムを提供し、関心のある教員および学校のコミュニティ化を図る必要があります。これらのプログラムを授業パッケージとして紹介するとともに、教員向けの授業レクチャーを行う機会を創出します。

## 7. 教員からの授業事例の発信を行う。

教員自身に取り組んだ授業事例を発信し広めていけるような施策を実施します。具体的な場としては、「社会貢献教育オープンシンポジウム」（2014年より毎年開催し、約100名のNPO関係者、教育関係者などが参加）などを活用し、関心のある教員同士や関係者を結ぶ取り組みを行うと共に、教員のオンラインコミュニティでの発信や教育関係メディアなどへの記事化をすることで関心のある教員へ情報を届けていきます。事例紹介にとどまらず、社会貢献教育の学校教育におけるさまざまな展開の可能性も示すことで、社会貢献教育の可能性の理解を促します。

## 8. 社会貢献教育を文教政策に明確に位置付ける。

文部科学省、中央教育審議会、各都道府県教育委員会、小中高校の全国学校長会などと連携し推進のための具体的な方策を検討します。例えば、小学校では総合的な学習の時間は、35～70時間で設定されており、クラス担任がほぼ全教科を担当しているため、他教科との関連性をつけやすく、中学校や高等学校と比較し社会貢献教育が導入しやすい状況にあります。また、前掲の通り、高校では新科目「公共」の設置が予定されており、教科と連携した形で社会貢献教育を実施していくための流れを加速させていきます。

## 6. 子どもたちの変化

募金して下さる方が「がんばって!!」と声をかけてくれるたびに元気をもらった。(中学生)

自分も人の役に立つことができて良かった。(中学生)

世界の出来事に対して、自分たちが働きかけることで周囲の人に知ってもらえることができ、支援できることを知った。(中学生)

### 自分自身の変化

今日の「寄付の教室」で、世界の人たちに愛をおくれるように頑張っている人たちのことを教えてくれて、もっと世界の人たちの力になれると思いました。ぼくも寄付で世界中の人たちの力になれるといいなと思います。(小学生)

寄付をすると少し心があたたまります。(小学生)

自分一人くらいでは何も変わらないと少なからず思っていたけど実際に変わって結果が出ていると知ってとても嬉しかった。(中学生)

自主的にチラシを配ったり、セリフを考えたりして助けあえた。(支援学級の生徒) みんなと一緒に良いことができた。(中学生)

活動をやっている中で協力することができた。(中学生)

車いすに乗った方がわざわざ箱のところに来て、「がんばってね」といつてくれた。(中学生)

### 周囲との関係の中での気づき

とても充実した1時間を過ごすことができました。日本人の活躍で世界の人々が救われていると思うととてもかっこいいと思います。(高校生)

一人ひとりの小さな寄付かもしれないけど、それがつながってさらなる寄付を生むんだなと思った。(高校生)

(寄付などは)自分には関係ないものではなくこのような(寄付の教室)授業でお世話になった分返さなくてはならないと思いました。(高校生)

# 教員の声

教員自身が恥ずかしながら「一緒にやる」ことが大切。生徒は教員の姿勢を見ている。教員自身も生徒と一緒に成長しようとする姿勢が重要。(中学校教諭)

いつもの授業と違って、生徒に引っ張られる経験だった。自分だったら凹んでしまうようなことを生徒が頑張りぬいていたことが印象的だった。(中学校教諭)

子ども達自身は「社会貢献したい」という気持ちを持っているが、普段、それを出す学習機会がない。課題設定や寄付先決定まで関わることは、生徒たちにとっては非常に達成感がある。(中学校教諭)

自分のため、というだけでなく、人を助けたり環境を良くするためのお金の使い方があることを学べることは、他にはない経験となったと思う。(中学校教諭)

普段つながりのなかった地域の人が中学校、中学生をどう見ているのか、知る機会になり、今後地域の方々と連携していくための良い機会になった。(中学校教諭)

普段あまり交流のない地域の人が、好意的に受け入れてくれたのが嬉しかった。今後も地域との連携を考えていきたい(中学校教諭)

もっと多くの具体的な支援団体、活動団体、支援方法など、次の展開として提示したいと思った(教師側の課題)。子どもたちの高まった関心に応えたい。(中学校教諭)

継続的に実施したいです。もっと自主的に学び子どもたちの知りたい気持ちや寄付につながる気持ちを高められるよう学校でも工夫したいです。(中学校教諭)

社会や道徳の時間の出前授業として行って頂けると、教科学習にも厚みが出てくると感じた。(中学校教諭)

私自身もっと学ぶこと。教師の寄付感、つまり社会とのかかわりを持つこと。もっと学んでいきたいと思います。(小学校教諭)

実際に課題だと思っていてもどうしていいかわからなかったり、自分の力ではどうしようもないと思っている子どもたちに実際の金額を提示して考えさせられていたので分かりやすく刺激になったと思う。この学校の子供たちは経済的に恵まれている子が多いので、こういう活動は普段の授業の中でも考えさせていきたい。(小学校教諭)

# 7. 実施事例紹介

	<b>実施例 1：「寄付の教室」</b>
<b>実施主体</b>	日本ファンドレイジング協会
<b>ねらい</b>	「寄付の教室」は、小学生・中学生・高校生を対象に、「寄付を考え体験する」ことを通じて、社会とのつながりや社会貢献について学んでいくことをねらいとしています。
<b>授業概要</b>	<b>教科・領域：</b> 総合的な学習の時間 2 時限分 <b>学校名：</b> 姫路市立林田中学校 <b>学年：</b> 2 学年 <b>参加人数：</b> 45 名
<b>活動写真</b>	

## 「寄付の教室」

90～100分・2時限（最大1クラス・約40名）


**目的：**さまざまな社会の課題があることを知る。いろいろな考えがあることを知る。誰でも参加できることを知る。

**目標：**子どもたちが、寄付を通じて社会貢献に目を向けるようになる。社会に必要とされる存在であることを実感し、自己肯定感を養えるようになる。寄付のできることを実感できるようになる。寄付の達成感を得る。

## 進行例

1. 導入（10～15分）：・自己紹介、授業のポイントの紹介、アイスブレイク
2. NPO の理解を深める（5分）：  
企業と行政との対比から NPO を紹介、NPO を応援する方法を示す。その一つとして寄付を紹介、身の回りの商品などで NPO を紹介する
3. 受益者ストーリーによる NPO の紹介（10～15分）：ビデオ教材による NPO の紹介×3 団体
4. 個人ワーク「あなたの自身の考えを教えてください」（5分）：誰を助け、どの団体を応援したいですか？
5. グループワーク「グループで応援したい NPO は？」（25分）：  
応援したい NPO ごとグループ分け、個人の意見をグループ内で発表後、なぜその NPO にしたのか？魅力は？などまとめる
6. 全体発表（10分）：グループごとの結果を発表
7. 寄付の達成感（2分）：受益者からの感謝の手紙を読み上げる
8. まとめ（3分）：社会の誰かにとって自分自身の存在が役立つ、寄付によって生まれたストーリーの紹介、寄付によって社会に変化が起こせる。
9. 振り返り学習（15分）



	<b>実施例 2：「社会に貢献するワークショップ」</b>
<b>実施主体</b>	日本ファンドレイジング協会
<b>ねらい</b>	社会貢献・寄付・ボランティアを肯定的に捉えられる状態になることを目的に、①自分の生活の延長線上で社会貢献を考えられるようになる、②社会貢献・寄付・ボランティアに対する誤解をとる、③社会貢献・寄付・ボランティアには多様な関わり方があることを知り、自分にも何か出来る事があるかもしれないことを知る、ことをねらいにしています。
<b>授業概要</b>	<b>教科・領域：</b> 学校特設科目「国際 A」 <b>学校名：</b> 東京学芸大学附属国際中等教育学校 <b>学年：</b> 1 学年（中学校 1 年生） <b>参加人数：</b> 105 名
<b>活動写真</b>	

### 「社会に貢献するってどういうこと？」ワークショップ

90～100分・2時限（最大1クラス・約40名）

目的：社会貢献（寄付・ボランティア）を肯定的に捉えられる状態になる。

目標：

- 1 時限目：自分の生活の延長線上で社会貢献を考えられるようになり、自分にも何か出来る事があるかもしれないことを知る。
- 2 時限目：社会貢献・共助がなぜ大切なのかに気づき、自分の身の回りにもあることを知る。

#### 進行例


##### 1 時限目【あなたにとって社会貢献とは】

1. 導入：クイズ&生徒の体験&寄付者の気持ち（10分）
2. レクチャー：日本の社会貢献の現状（10分）
3. ワーク1：いまのあなたの社会貢献イメージは（10分）
4. ワーク2：社会貢献できる分野のうち興味ある分野から2つ選ぶ・理由は？（15分）

##### 2 時限目【社会貢献はなぜ大切？】

1. 導入：フィクションのショートストーリーから社会課題に直面した時に自分のできる事を考える（5分）
2. レクチャー：実際の状況とその状況に対する支援の形（10分）
3. アクティビティ：この中に社会貢献はある？（5分）
4. ワーク3：「寄付・ボランティアはなぜ必要？」（10分）
5. 振り返り（10分）
6. 生徒の感想（5分）

※ 1 時限目と 2 時限目は別々に 1 コマのワークショップとして行うことも可能です。

	実施例 3：「Learning by Giving」
実施主体	日本ファンドレイジング協会
ねらい	①社会貢献に関する様々な知識と理解を深めること、②社会貢献を通じて、現代社会が抱える課題について把握すること、③市民として一人ひとりが「社会貢献」の力を認識して活用できるようになること。
授業概要	教科・領域：学校特設科目「国際 A」 学校名：東京学芸大学附属国際中等教育学校 学年：6 学年（高校 3 年生） 参加人数：12 名
活動写真	

## Learning by Giving


半年・28 時限

目的：①社会貢献に関する様々な知識と理解を深めること、②社会貢献を通じて、現代社会が抱える課題について把握すること、③市民として一人ひとりが「社会貢献」の力を認識して活用できるようになること。

目標：ボランティアと寄付を軸に「社会に貢献する」仕組みや、「社会貢献」を取り巻く現状や課題を学ぶ。そして、自身の行動選択の軸として「社会貢献」を評価・検証するスキルを身につける。

### 進行例

- Unit1 (1～3 時限) 人はなぜ社会貢献（ボランティア・寄付）をするのか、これまでの自分の活動をふりかえる。
- Unit2 (4～8 時限) 非営利組織はなぜ必要なのか、非営利組織が必要とされる背景と課題について。
- Unit3 (9～11 時限) 社会変革とお金の使い方① 寄付の可能性、寄付で何ができたのか、できるのか。
- Unit4 (12～14 時限) 社会変革とお金の使い方② 寄付の集め方、ファンドレイジングとファンドレイザー。
- Unit5 (15～17 時限) これまでの学びをもとに、個人・チームでファンドレイジングプランを作成し、評価する。
- Unit6 (18～20 時限) 寄付先を決定する。グループで寄付先の団体をリサーチし他グループとダイアログを行い、寄付先の団体を一つ決定する。
- Unit7 (21～23 時限) 企業はなぜ社会貢献活動を行うのか、日本における企業の社会貢献活動。
- Unit8 (24～28 時限) 社会貢献とこれからのキャリアを考える、今後の自身のキャリアと「社会貢献」の関係について考える。

	<b>実施例 4：「チャリティーチャレンジ・プログラム」</b>
<b>実施主体</b>	日本フィランソロピー協会
<b>ねらい</b>	課題の解決に向けて募金、寄付等に参画することを通じて、社会貢献意識（ボランティアマインド）、思いやりの心、他者への信頼、地域への愛着（郷土愛）・参画意識、主体的に行動し他者と協働する力、課題解決能力、コミュニケーション力を育てること。
<b>授業概要</b>	<b>教科・領域：</b> 総合的な学習の時間 <b>学校名：</b> 杉並区立杉並和泉学園 <b>学年：</b> 3 学年（中学校 3 年生） <b>参加人数：</b> 28 名
<b>活動写真</b>	

## チャリティーチャレンジ・プログラム

3 ヶ月～半年・15 時限～

目的：募金活動などの社会貢献活動を通じて、社会貢献意識や思いやり他者への信頼などを育てること。

目標：地域への愛着や参画意識、課題解決能力やコミュニケーション能力の育成、主体的に行動し他者と協働する力などを獲得すること。

### 進行例

#### 1 時限目

- ・導入：オリエンテーション：導入としての課題設定（25 分）
- ・ディスカッション：提起されたテーマに関する地域課題をグループで話し合う（25 分）

2・3 時限目 フィールドワーク or 座学（NPO の現場訪問 or ゲストティーチャートーク & 感想共有）（100 分）

4 時限目 ディスカッション（どんな寄付ができるか話し合い（25 分）、全体発表クラスでまとめる（25 分）50 分

5 時限目 ツールの作成：ポスターや募金箱作成

6・7 時限目 募金活動の依頼（ロールプレイ、リハーサル（25 分）、実施場所に出向いてご説明（75 分）

8・9 時限目 募金活動：個別募金、街頭募金

10 時限目 集計（20 分）と振り返りディスカッション（30 分）

11 時限目 活動発表・贈呈式：寄付先を招き寄付金贈呈（50 分）

12 時限目 振り返り：活動を振り返り（25 分）、話し合いの内容を発表（25 分）

13 時限目 募金の報告・御礼：募金協力先へのお礼状作成（30 分）、お礼の伝え方練習（20 分）

14 時限目 募金の報告・御礼：募金の協力先を訪問し御礼を伝える（50 分）

15 時限目 振り返り：活動全体を通じて振り返り（30 分）、話し合ったことを全体発表（20 分）

#### **社会貢献教育推進フォーラム 委員**

鵜尾雅隆（認定 NPO 法人日本ファンドレイジング協会 代表理事）

唐木清志（筑波大学人間系 准教授）

高橋良太（社会福祉法人全国社会福祉協議会 地域福祉部長）

高橋陽子（公益社団法人日本フィランソロピー協会 理事長）

早瀬昇（認定 NPO 法人日本 NPO センター 代表理事）

藤木正史（東京学芸大学附属国際中等教育学校 教諭）

村上徹也（日本福祉教育・ボランティア学習学会理事／日本福祉大学教授）